〔書評〕

牛山初男著「東西方言の境界」

馬瀬良雄

一

この書は、著者のデビュー論文「語法より見たる東西方言の境界線について」（昭27・7）をはじめとし、最近の「語法から見た中部日本方言の分布――中部日本方言の区分けのための――」（昭42・11）に至る、主要論文九篇を収めた論文集である。

著者が処女論文を世に問うた頃、私はまだ一介の学部の学生にすぎず、収録論文の三分の二は、私が方言学に志すよりも前に出されている。したがって、著者は私にとって学問の道での敬うべき先輩であるが、著者とはその後学問を通じて親しく交わり、調査などにも何度か御一緒させていただいた。そんな関係で、私は著者をあえて牛山さんと呼ばせていただこう。

ここに収録の牛山さんの諸論文の多くの声価は定まっており、この書の評価も、『言語生活』二一六号（昭和四四年九月）の「最近の方言研究〈書評座談会〉」で服部四郎・柴田武・加藤正信・徳川宗賢の諸氏によってなされ、また『週間読書人』での徳川宗賢氏の書評がある。今さら浅学の私が論ずるまでもないことであるとも思う。しかし、牛山さんの諸論文を越え、これらを発展させ、方言学に寄与するには、どういう点をさらに考慮しなければならないか――こういう点に主眼を置いた書評もあろうかと思う。そんな観点を中心に、以下所感を述べることにする。

二

収録の九篇の論文の題名・掲載誌・発表年月は次の通りである。

1「語法上より見たる東西方言の境界線について」（概要を『国語学』12輯に発表）（昭27・7）
2「未来助辞『ず』の分布について」（『信濃教育』八〇八号、昭29・4）
3「中部日本におけるサ行四段動詞のイ音便形の分布」（『信濃』六巻七号、昭29・7）
4「推量の助動詞『ずら』『ら』等の分布」（『信濃』六巻六号、昭29・6）
5「二、三の語の分布から見た関東・東海東山方言の境界線について」（『信濃』七巻一号、昭30・1）

6「長野県諏訪地方方言の共通語化について」(『信濃』七巻九号、七巻一〇号、昭30・9～10)
7「中部日本における近畿方言の分布」(『信濃』一〇巻一〇号、昭33・10、一〇巻一二号、昭33・12、一一巻二号、昭34・2)
8「二人称代名詞『われ』の分布とその使用の盛衰について」(『信濃』一八巻七号、昭41・7)
9「語法から見た中部日本方言の分布――中部日本方言の区分けのための――」(『東洋大学文学論藻』37号、昭42・11)

以上の論文を、その分野に応じて次のように分ける。

(イ)　1・2・3・4・5・7・9
(ロ)　6
(ハ)　8

(イ)のグループの諸論文は、書名の東西方言の境界を追求したものであり、(ロ)は長野県諏訪地方方言の共通語化の要因と過程を論じたものであり、さらに(ハ)は二人称代名詞「われ」の諏訪地方における分布とその使用の盛衰を論じたものである。

ここでは紙幅の関係もあり、(イ)・(ロ)について論じ、(ハ)は省略に従う。

三

第一のグループの論文はどれも、東西方言の接触地帯である中部地方を中心として、語法的特徴の分布を明らかにしたものである。ここではデビュー論文である「語法上より見たる東西方言の境界線について」を中心に論じ、他の七つの論文にも必要に応じて触れることにしたい。

まず諸論文の概要につき、最も簡略な形であっても述べておく必要があろう。

はじめに調査の方法について。

諸論文の資料は主として高校あての通信調査によって集められた。調査の対象は高校生と五十歳以上の中老年層の二つの層に分かれる。そしてまず高校生に彼等の使用言語を内省して報告させ、さらに高校生を調査者として中老年層の言語を調査報告させるという方法をとっている。牛山さんは以上の通信調査のほか、要地の臨地調査も行なっておられる。調査地点は調査当時(昭和二五～二六年頃)の各町村を単位として、四～五名ずつ高校に依頼した。しかし、実際にはある町村は十名以上の報告者があったり、またある町村は一名の報告者しかないというように統一的にはいかなかった向きもある。

次に調査項目に移る。

第一論文で扱われた項目は次のとおりである。

1 行かない　行かん(ぬ)
　 取らない　取らん(ぬ)
2 これだ　これぢゃ(や)
3 白くなった　白う(ろ)(白)なった
4 受けろ　受けよ(い)
　 起きろ　起きよ(い)
5 買った　買うた
　 買って来た　買うて来た

第二論文以下では次の項目が扱われている。

意志を示す～ズ・～ベー(行カズ・行クベー)、動詞サ行イ音便の

有無（動詞「落とす」の場合）、推量を示す～ズラ・～ラ・～ダラ・～ダラズ・～ツラなど、さらに近畿方言の特徴として、打消表現の～ヘン（買ヤヘン）・アコー（赤う）ナイ、断定の～ヤ（ソーヤ）・～ドス（ソードス）、敬譲の～ヤス（オヤスミヤス・オイデヤス）・～ハル（来テハルカ）、命令の～ヨ・～イ（見ヨ・見イ）、理由を表わすサカイ、動詞・形容詞の条件形～タラ（行ッタラ）

これらは詳細な分布図に示され、何枚かの地図は高校生のも添えられている。

各論文の結論とするところを紹介することは紙幅の関係でできないが、有名な第一論文の結論だけを紹介すると次のとおりである。

1　東西方言の境界線は、北は新潟・富山の県境と、南は静岡・愛知の県境を結ぶ線である。もっとも、長野県の南部、さらに静岡・愛知の両県では、五つの語を総合して一線を画することは無理な状態である。

2　この結果は、五十年前国語調査委員会の調査によって見出された東西方言の境界線と一致することになり、五十年前の状態も現在の状態も変わらないことが分かった。

3　高校生の言語による境界線も、結論的には中老年層のそれと変わらない。

4　標準語教育がこれら五つの言い方について関西方言に及ぼす影響はごく少ない。

以上のようにこれらの論文は、いずれも東西方言の境界地帯で、語法的諸特徴を指標に、それらの分布を丹念にまた執拗に追求し、さらに東西方言の境界線を明らかにすることに主眼を置いている。

牛山さんが調査された項目の幾つかは、明治時代国語調査委員会によって一応は調査されたとはいうものの、道府県に依頼した役所の仕事で、調査の網も精粗さまざまであり、報告書の信憑性に問題があり、必ずしも信頼できるものではなかった。したがって牛山さんの調査結果は、国語調査委員会の結果の修正ないし多くの地域での全面的改訂という点で大きな意味を持っていた。

それは日本方言学の発展のために、誰かがしなければならない最も重要な基礎的な仕事の一つであった。それが牛山さんの手によってなされたのである。

また、柴田武教授も序文で述べておられるように、大方の学者は、東京の標準語の勢力に押されて、東西方言の境界線は少し西の方に寄ったのではないかと考えていた。それが牛山さんの研究で少しも動いていないということが明らかになった。これも大きな発見であった。

牛山さんがこれら諸論文で明らかにされた語法的特徴の分布や境界線の発見が、その後の日本方言学にどのように貢献したかは、はかり知ることができない。どの論文もはったりめいた点はなく、客観的な記述的態度で終始し、大きな内容をつとめてコンパクトな形で表現されようとしている。ここに牛山さんの学風をみることができる。

第一論文の発表当時、多くの讃辞とともに幾つかの批判が寄せられた。その一つとして、調査項目が国語調査委員会の調査項目と完全には一致しないという非難がある。この点は確かに問題であり、ある語法的特徴が、その方言で退縮中のような場合、あるいは新たに進行中のような場合、語彙的選択の如何によって等語線の異なる

ことは、当然のことながら考えられる。しかし、「目的にかなったよりよい調査票ができるとすれば、それは調査の終了をまたねばならないだろう！」（J・ジリエロン『動詞の病理学と治療学　第一巻』〈J. Gilliéron: Pathologie et Thérapeutique verbales I〉四五ページ、一九一五年）という、有名なことばもある。今後の調査に期したい。

また、この調査が通信調査によるものであって、臨地調査でなかったことに対しての批判もあった。しかし、中部日本という広い地域を、たとえ町村単位ででも臨地調査は大変な労力と莫大な費用のかかる仕事であり、とうてい一人の力で行なうことは不可能である。そして通信調査も、方法を誤らなければ非常に有効な手段であることは、諸外国の例を見るまでもなく、牛山さんの調査結果がハッキリと物語る。しかし、私は、この通信調査の方法が必ずしも完璧であったとは考えない。

この調査の資料は、高校生の内観による彼等の言語の報告と、言語調査には素人の高校生による中老年層を対象とする言語調査の結果からなっている。この方法に多少の問題があろう。恐らくはこの方法によったため、そして質問方法にさらに工夫を加える必要性のあることとあいまって、項目によって資料の正確さに多少首をかしげたくなる地域がないわけではない。もちろん私は牛山さんのような広範な地域の調査を試みたわけではないので、その物言いはわずかに長野県さらには岐阜県の一部という狭い地域の分布に限られる。たとえば、巻末の「だ」「じゃ」の分布図では長野県の各地に点々として～ジャを少しく混用する地域がある。質問の仕方の詳しい説明がこの項目に関してないのでハッキリしたことは言えないが、これは質問の意味を取り違えて、コレジャナイなどの～ジャを記入したものではなかろうか。他の項目でもこのように西部方言的表現が長野県各地に点在している疑わしい場合があるが、省略に従う。

また逆に、地図には東部方言的表現の分布の記載しかないのに、実際には西部方言的表現の分布の見られる場合がある。たとえば、動詞サ行イ音便形の分布がそれである。牛山さんの調査では、長野県では西筑摩郡・下伊那郡にその分布が見られるという（二八ページ）。私の調査では、その他に、松本平、上伊那郡、諏訪郡にもその混用が認められる。いま、上伊那郡一帯、諏訪郡・下伊那郡の一部地方での同じ項目の分布を示すと図1のとおりである。

この場合は明らかに質問の仕方に問題が潜んでいると思われる。牛山さんは次のように述べておられる。

調査の方法は、主として各地方の高等学校国語科教諭を煩わしてその学校の生徒に依頼し、その地方について「落して」「落いて」の両形をあげ、その使用する方に◎印を、使用しない方に×印を附して返送していただき、両方用いる場合はその旨を、又それ以外のものを使用する場合もその旨を附記していただくよう依頼したのである（二六ページ）。

この場合、「落して」「落いて」の二者択一という点に問題があるのであって、この二形のほか、オトイテの連母音oiの融合形を挙げなければならなかったのである。つまり、少なくともこの地域では、オトシテ・オトイテ・オテーテの三形をあげることが必要である。松本平・上伊那郡で用いられているサ行イ音便形は上伊那郡の南部を除いてオテーテであるから、この質問形式からはこれらの地方では併用の極めて多いオトシテへ◎をつけることより他はなか

図1　落した

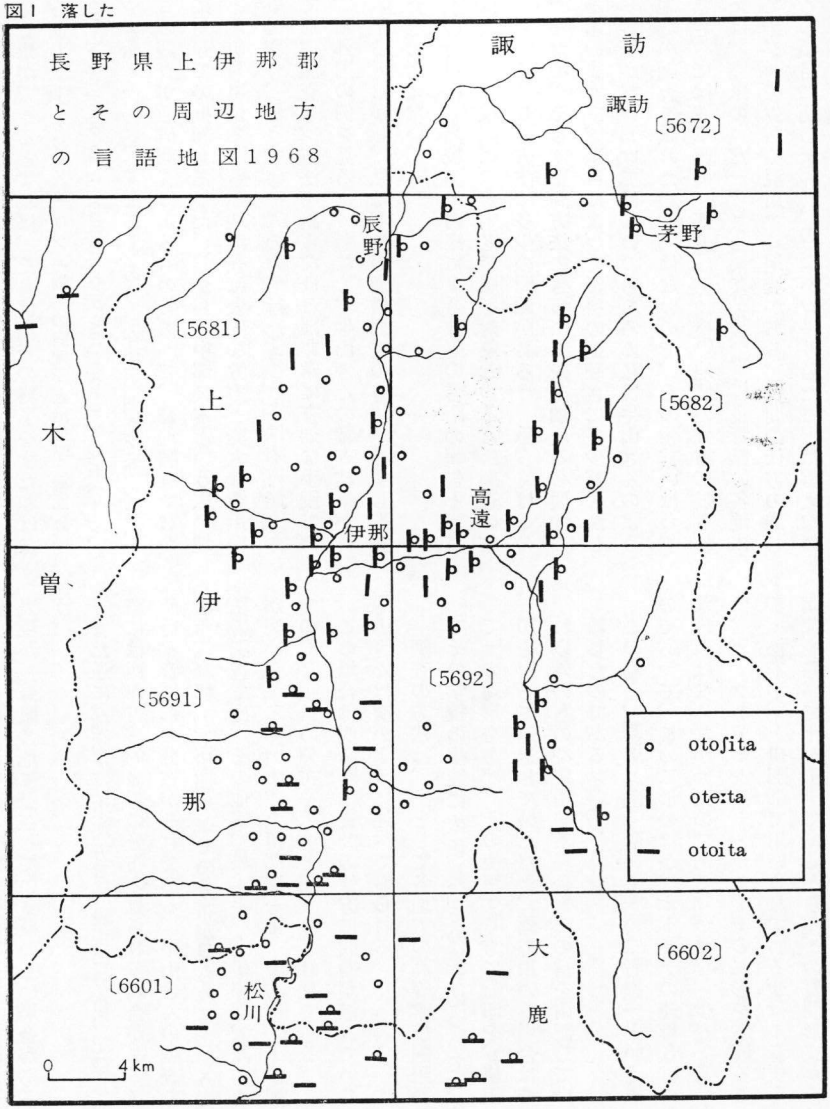

長野県上伊那郡
とその周辺地方
の言語地図1968
諏訪
諏訪
〔5672〕
辰野
茅野
〔5681〕
上
木
〔5682〕
高遠
伊那
曽
伊
〔5691〕
〔5692〕
那
otoʃita
oteːta
otoita
〔6601〕
松川
大鹿
〔6602〕
0
4 km

図2

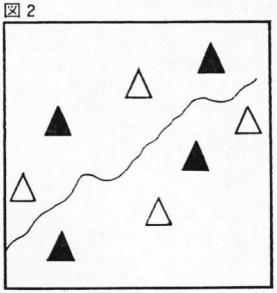


図3

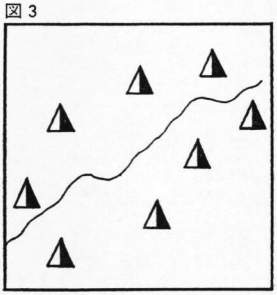
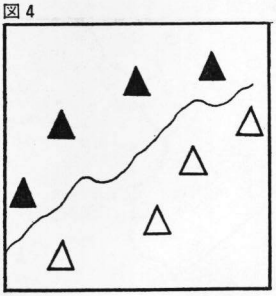


図4



五〇パーセントの分布をし、他の語形Bも五〇パーセントの分布を見せると仮定した場合、恐らくこの処理の背後では、牛山さんは次の図2・図3のような分布を考えておられたことと思う。図2はA(△)とB(▲)とが任意の町ないし村で一定の分布を見せない場合であり、図3はA・B両形をどの集落も混用しているという場合である。しかし、この数値は図4のような一定の分布を考えることも可能である。この場合は町村を単位とした数量的処理が分布の実態をおおいかくすことになる。実例を信濃と飛騨の国境地帯の言語調査にとろう。図5・図6を見てほしい。二つの言語形式が、図5では奈川村の中で、図6では安曇村と奈川村の中で、きれいな対立分布を示している。また、ある形式が一〇%とか二〇%というような低率の回答であっても、それがいわゆる隠れ里のような集落における、古い方言の露頭である場合もあるのである。図7における~daと~3aの分布を見よ。岐阜県上宝村中尾・高根村日和田（ともに長野県の影響の強いところである）の~da、長野県奈川村入山の~3a（ここでは、このほかに岐阜県方言の多くの要素が認められる）は、このような数量化では無視されることになる。得られた資料の数量化の操作は今後の課題として残る。もっとも一〇%とか二〇%とかいう低率の回答の場合、それが特殊な集落の方言かどうかというようなことは、このような広い地域での通信調査では求めること自体に無理がある。最初にもことわったように、今後の問題として、この論文を越えて発展させるという際に、初めて意味を持つものである。

以上かなり細部にわたる物言いをしたが、それらは牛山さんの出された結果の大局にわたっては何等影響を及ぼすものでないことを

たと推定することができよう。通信調査による場合、牛山さんの調査に限らず、より正しい結果が出てくるようにその方法にさらに工夫を加える必要があろう。

通信調査の方法、またそれによって生じる部分的な資料の正確さの問題は、今までに何人かによって指摘されたことと思われるので、紙幅を考えてこれでとどめ、むしろ、資料の操作方法における問題、また牛山さんの出された結論の幾つかに対する疑問を、ごく素朴な形で提出したい。

牛山さんは、町村を単位として、調査結果を、ある語形を五〇パーセント以上を用いる地域、五〇パーセント以下に用いる地域というように数量的操作をほどこしておられる。だがこのような処理が果たして適切であるかどうか。たとえばある町村で、ある語形Aが

つけ加えよう。

第二に問題としたいのは次の点である。

東西方言の境界線は五十年前と比べて動いておらず、また高校生のそれもやはり動いていないということから、牛山さんは、方言は語法を取ってみた場合、非常に変わりにくい、そして標準語教育の関西方言的特徴に及ぼす影響は少ない、という結論を出しておられる（一一ページ～一三ページ）。ここで取り上げるのはこの結論それ自体である。

今、個人が場面と関連して持つ言語層を図式的に(A)統一的言語層、(B)中間的言語層、(C)基底的言語層と名づけよう。(A)は公けの場面で使われ、その地方で広く共通語的に用いられる言語であり、(C)はごくくだけた場面で使われる言語である。そしてこの両極の間にある言語層が(B)である。もちろん、この各言語層はさらに幾つかの言語層に細分されることが予想される一方、また個人によっては

図5　居る

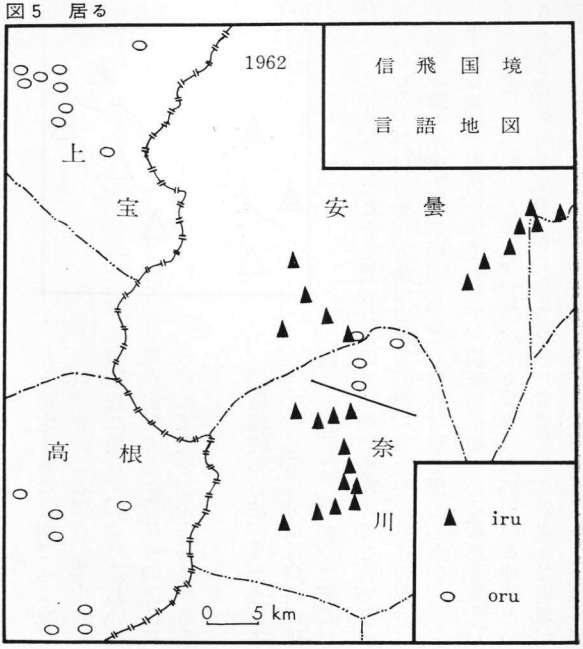


図6　「梨」のアクセント

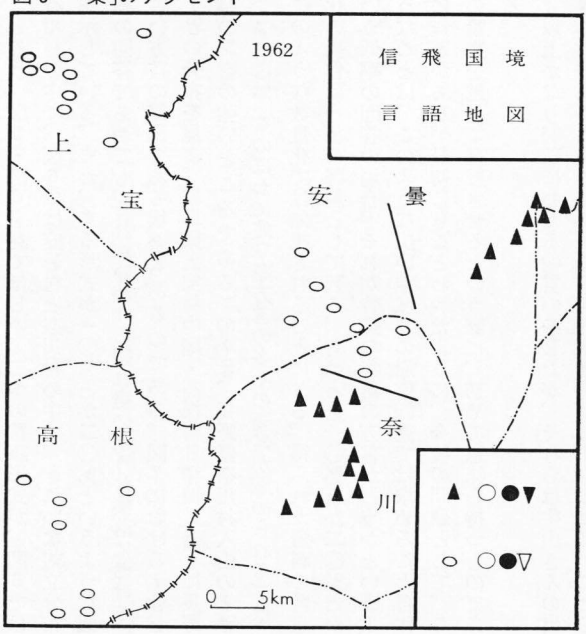
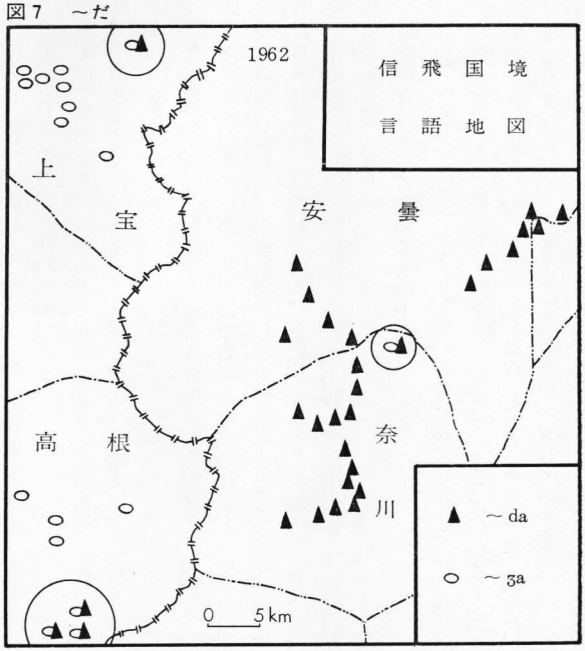


図7　～だ



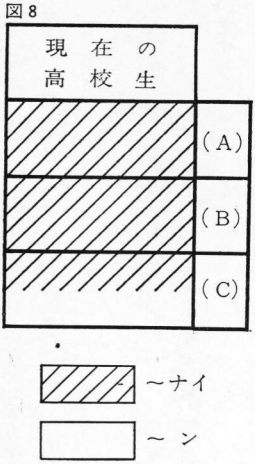
(A)、(C)二つの言語層しか持たないというような場合もあろう。

いま、～ナイ／～ンを例にとろう。牛山さんによれば、～ンの地域でも地域により～ナイの混在があり、高校生では～ナイはさらに増えるという。特に静岡・愛知の両県で混用が多く、地域によってはほぼ同等に用いられているところも少なくないという(四ページ)。

そうすると、私たちは次のような言語状態を想定することが可能である。～ン地域の若干地域―いま、静岡・愛知の両県をとるならば、現在の高校生では、少なからざる地域で、～ナイが(A)統一的言語層・(B)中間的言語層に浸透し、そして、高校生の調査では、特に「お友達や家の方と話す」場面での回答を要求している(二ページ)ところからみて、もしこの回答をその額面どおりに受け取るならば、～ナイが方言の基底層にまで到達した状態さえも考えられる。つまり、これを図式的にあらわせば、図8のような状態と見ることができる。そうすると、境界線が動かないからと言って、方言が語法に関し、変化しにくいと、かんたんには言い切ることはできないと思う。これらの地方ではこの場合に即して言えば標準語～ナイの浸透が目に見えて行なわれていると見ることができよう。

また、これも今後の問題に属することになるが、視覚に訴え、標準語による口語的表現の多いテレビの出現は、方言の標準語化に拍車をかけることが予想される(牛山さんの調査当時はテレビはこの地域になかった)。その結果、～ナイの西進ではなく、境界線の西側地域の内部で、都市を中心に～ナイが勢力を占め、それらの諸都市から放射される～ナイはやがて結び合い、～ンの言語島が点在する将来も予測される。

図8



以上、(イ)のグループの諸論文の内容の紹介、それらの価値について述べたあと、資料の信憑性、調査方法・資料処理の問題点、結論の一部に対する疑問等について、私の考えを述べた。

四

「長野県諏訪地方方言の共通語化について」――この論文は、長野県諏訪郡下の地域社会の言語生活の実態を、方言の共通語化の要因と過程という点にスポットをあててまとめたものであり、国立国語研究所の白河市での調査（昭24）及び鶴岡市での調査（昭25）に対しての追試としての意図を持つものである。

白河市や鶴岡市と、言語の面でも社会構造の面でも違う諏訪地方で、牛山さんはどんな調査をされ、どのような結果が出たかを、まずかんたんに紹介しよう。

調査地域として、長野県茅野市のうち旧ちの町地区と、旧湖東・北山両村地区が選ばれた。前者は諏訪の都市部の代表として、後者は農村の代表として。調査対象として十年を単位として各年齢層にわたり男女別に一定数が選ばれ、全体としてちの町一二〇人、湖東・北山地区で九〇人が目標とされた。調査者は牛山さん。戸別訪問による面接調査。

調査項目は語法に関する次の十項目。

(一)「そんなことはあつかましくていえませんでした」というようなときに、「イエナカッタ」「イエナンダ」のようにいいますか。

(二) 朝、目をさまして、「あぁよくねむった。さぁ起きよう」というようなとき、「サテオキズ」のようにおっしゃいますか。

(三) 隣の方を誘って学芸会（婦人会）に行こうとして、「もう時間だからぼつぼつ出かけよう」というようなとき、「デカケマイカ」「デカケネーカ」のようにおっしゃいますか。

(四)「なにか音がする、バスが来るだろう」というとき、「来ルズラ」のようにいいますか。

(五) 目上の人に向って、「ちっともお帰りにならないので心配していました」というとき、「オ帰リニナラナイモンデ」のようにおっしゃいますか。

(六)「上川ではとても大きな魚がとれるんですよ」というとき、「トレルゾ、トレルンダゾェ」のようにいいますか。

(七)「もっと早くこなければだめじゃないか」のように、目下の者に向っていうとき、「コニャァ、コナケリャァ」のようにおっしゃいますか。

(八) 近所の人に道であって、「今日は寒いね」と話しかけるときに、「寒イナァ」というようにおっしゃいますか。

(九) 同級生に道で会って、お互に同級会があると知っているとき、「同級会に行くだろう」というとき、「行クラ」のようにおっしゃいますか。

(十) 子供や弟が山へ行って、寒い日帰って来たとき、「今日は山は寒かっただろう」というとき、「寒カッツラ」というようにおっしゃいますか。

右の項目で、方言形を用いれば一点、共通語形を用いれば零点を与え、その得点の多少によって共通語化の程度を数量化し、共通語化の要因について考察が加えられる。旧ちの町での共通語化の要因として、目立つものとして、性・年齢・学歴・本人及び家の職業・標準語教育・言語関心があげられ、やや低い要因としては、往き来・

映画の利用があり、一方、出生地・父母・配偶者の出身地・新聞の利用などは要因として認められないという。湖東・北山地区でもほぼ同じ結果が出ているが、性・年齢が要因から除かれている。

共通語化の過程としては、場面・人・言語構造の三つが取り上げられている。

場面では、(イ)家の人、(ロ)隣の人、(ハ)旅の人、知らない人の三つの場面が取られ、どの場面から共通語化するか、L. Guttman の尺度解析により分析される。その結果は、(ハ)(ロ)(イ)の順で共通語化が行なわれるという。

次に人・構造面について共通語化が論じられているが、省略する。

最後に、共通語形に対し諏訪方言でどのような反応を示すかについて述べられ、論文は終わる。

以上がこの論文の概要である。

この論文の価値を一口で言い表わせば、国語研究所の白河・鶴岡での共通語化の実態についての調査の追試を、異なった地域で行なったという点がまずあげられよう。全国に方言研究者は数多いが、個人であれ、協力者とともにであれ、国語研究所の調査にかなり忠実に、追試を行なった事例を、私は聞かない。私も、昭和三六年から三八年にかけて、長野市及びその周辺の農山村で、研究所の調査を手本としたミニ調査をしたことはあるが、このように忠実な形ではなく、したがって追試と言えるようなものではなかった。

次に、国語研究所の調査とほぼ同じ結果が確かめられ、研究所の結論に普遍性が与えられたことも、論文の価値として数えられる。

牛山さんが調査部門として語法を選ばれたことは、白河・鶴岡と異なり、諏訪地方では音韻面ではそれほど多くの柱を立てることは困難であることからみて、賢明な方法であったと思う。

だが、項目の選び方・質問の方法には多少問題があろうかと思う。たとえば、(ロ)と(ハ)とは、一方は「バスが来るだろう」であり、他方は「同級会に行くだろう」であり、ともに現在の推量をその目印としている。十の項目の中にまったく同じ語法的項目がはいっているのはうなずけない。これと似たことは、詳細は省くが、(ヘ)と(ホ)とについても言える。

三でも述べたように、個人は幾つもの言語層を持っており、現実の言語生活でどの層の言語を用いるかは、場面によって規定される。したがって質問にあたっては、どういう場面での言語を求めようとするのか、質問における場面の規定をもっと明確にする必要があると思う。

たとえば(ハ)を取り上げよう。ここで期待される共通語の回答は〈サムイネ〉であり、〈サムイナァ〉は方言として処理される。①しかし、近所の人でも、ごく親しい人、しかも年下・目下の者に対しては、共通語による言語生活で〈サムイナァ〉は当然現われる表現である。もし〈サムイネ〉を取って、〈サムイナァ〉を方言的表現として処理するならば、質問の場面をもっともっと細かに規定しなくてはならない。②なお、この調査項目は国語研究所の白河調査を手本としたものである。

① はしなくもここで共通語とは何かという問題――たとえば、(ヘ)でイエナカッタ、(ホ)でトレルゾ、(ハ)サムイナァは共通語ではないか――が起こるが、この点についてはここでは触れない。

② 質問文にはあらわれていないが、牛山さんが、実際の調査では場面をさらに細かく規定し調査されたことも充分考えられる。その際は私の提出した疑問は意味を持たないことになる。

次にこの質問法は誘導尋問的な危険をはらんでいると言える。方言形式をあげて「～とは言いませんか」というこの調査の質問法も白河調査での語法の項目の質問にならったものであるが、この質問法は方言的表現を誘導する結果になりかねない。この点、鶴岡での調査は、共通語によってこれこれのことを何と言いますかという質問に改められている。だがここでは、今度は共通語的表現の出やすいことが予想される。いずれにしろ話者の内観を求めるという調査方法である。こういう点の配慮から、白河・鶴岡両調査とも共通語化の要因を求めるさいに、「語法」を取らず、その質問法から客観的反応の期待される「音韻」を指標としたのである。

たとえば、㈠△「そんなことはあつかましくていえませんでした」というようなとき、「イエナカッタ」「イエナンダ」のようにいいますか。▽を例に取れば、このような問いの形式で尋ねられれば、話者は、イエナカッタ～イエナンダをどんな場面であれ使っていれば、それに対して「使う」という回答を与えがちなことは容易に想像される。同じ推量表現を指標とする㈣と㈨の結果はこの懸念を裏づける。つまり、「△来ルズラ▽のように言いますか」と尋ねた㈣では男女とも△～ズラ▽の回答が最も多く（～ズラ五一名、～ラ一二名）、「△行クラ▽のようにおっしゃいますか」と尋ねた㈨では△～ラ▽の回答が多い（～ラ七二名、～ズラ三名）。（八六ページ～八八ページ）。

こういう質問法を改善し、さらに場面を細かく規定してみた上で、やはり、話者の内観を求めるというこの方法自体に問題は残ろう。

共通語化の過程で、場面に関しては当然すぎる結果が出たと言えるが、㈠家の人、㈡近所の人と話す場面の尺度解析の点数のかなり近づいている点――これはこの地方の共同体内部の緊密性・親近性を物語るものであろう。湖東・北山地区での結果は示されていないが、両場面の差は、恐らく、もっと少なくなっているのではなかろうか。なお、白河の調査では八場面、鶴岡では四場面が採られているが、牛山さんの調査では三場面である。もう一～二場面を加えた方がよかったのではないか。

湖東・北山両地区の調査結果は詳しくは述べられていないが、この地区では、性と年令という自然的要因が共通語化の要因として働いていないという。この点はもっと強調されてしかるべきではなかったろうか。このうち、「性」が共通語化の要因からはずされていることは、両地区の社会的環境からもある程度推測可能なことである。①

① 性については、私は次のような調査結果を持っている。長野市小田切区と長野県上水内郡鬼無里村での小・中学生の言語調査を分析した結果、長野市街地に近い小田切区では小学校六年生から性が要因としてあらわれたのに対し、長野市街地から遠い鬼無里村では、性は要因となり得なかった。

なお、数多い表の中には、数値の合わないものが若干ある。改訂版のおりに訂正していただけたらと思う。

この点、紙幅の関係で触れられなかった、㈠の論文でも同様である。この論文で、「われ」の使用地域の分布図（一三四ページ）のほ

かに、「われ」を聞いて分かる地域の分布図（一三五ページ）をのせ、方言研究に方言の理解意識を導入した点、新しい研究の局面を開いたと言えるが、この二枚の地図を比較してみると、幾つかの疑問が浮かんでくる。一例を挙げると、ある年代層で、「われ」を聞いて分かるパーセントよりも、「われ」を使うパーセントの値の大きな地点が二、三あるなど①。また、地点の位置が両図で異なり、一方では山梨県に、他方では長野県に属しているなど。恐らくは、作図者の誤りを、牛山さんがうっかり見過ごしてしまわれたというような事情が、そこにはあると想像される。これも再版の折にでも訂正していただきたいと思う。

① 牛山さんの数量的処理の方法では、一般的に言ってこういうことはありえないはずである。だが一方、通信調査であるため、一見矛盾するようではあるが、資料を客観的に取り扱われた結果が、こう出たのかもしれない。

五

始めにも述べたように、牛山さんの『東西方言の境界』につき、収録の諸論文を越え、さらにこれらを発展させ、方言学に寄与するにはどういう問題が克服されねばならないかという点から、先輩である牛山さんの著書に対し書評の筆を執った。

戦後の食糧事情その他あらゆる悪条件の重なった時期に、高校教諭しかも分校勤務という劇職のかたわら、諸論文に見られるような非凡な着想のもとに、周到な計画を立て、大掛かりな調査を実施に移された。牛山さんから直接伺ったところでは、第一のグループの論文における通信調査という場合も、一々現地の高校へ赴き、調査の依頼をされ、また調査票の回収のために現地を再び回られたという。回収率が百パーセント近かったというのも、牛山さんのこのような方法に裏打ちされているのである。臨地調査もその折を利用してされるとともに、通信調査終了後も適宜なさったという。こうして集められた資料は優に一万人分を越えたと想像される。牛山さんはこの膨大な資料を一枚ずつ繰り、丹念にまとめ、地図化して行かれた。助言者にも恵まれず、独力で、寸暇を惜しんで研究の道をひた進まれたその御努力の前にただただ頭の下がる思いがする。東西方言の境界地帯の方言分布についての大きな発見の数々、またそこから導かれる結論は、このひたむきな研究への精進があってはじめて可能だったのである。第二グループの論文についても調査の方法こそ違え、同じことが言える。

昭和四十三年三月長い間の高校教諭生活にピリオドを打たれたあとも、高校講師のかたわら甲信国境地帯の言語研究に打ちこんでおられる。ますます御壮健にあられることをお祈りするとともに、その御研究の進展と完成を願うものである。

なお、仄聞するところでは、牛山さんは退職金によってこの本を出版されたという。こういう本がそのような手段でしか出版できないという学界の現状をうれうるとともに、その打開に力を尽くすべきであることは当然であるが、それはそれとして、自己の学問の成果を多大の犠牲を払ってでも多くの人に頒ちたいという、牛山さんの学問に対するお気持ちに心からなる拍手を送りたい。（昭和四四年三月三〇日、信教印刷株式会社発行。A五判一六三ページ、折り込み言語地図六枚。頒価五〇〇円）

―信州大学助教授―